

まえがき

著者	渡辺 裕
雑誌名	東京音楽大学大学院博士後期課程 2019年度博士共同研究A報告書 : 《オリンピックと音楽》
ページ	1-2
発行年	2020-03-31
出版者	東京音楽大学
著者版フラグ	publisher
注記	編集・発行 東京音楽大学 非売品
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001344/



まえがき

渡辺 裕（音楽教育）

本冊子は、2019 年度本学大学院博士後期課程の開設科目「博士共同研究 A」の報告書である。音楽大学での教育は、ともすると専攻する実技ごとに細分化されたタコツボ的なものになりがちであるが、この科目は、そのような専攻の枠をこえて集まった学生たちが一つのテーマを定めて「共同研究」を行うというもので、いわば本学博士課程カリキュラムの「目玉科目」でもあり、これまでもその成果は随時、報告書として刊行されてきた。本年の「共同研究 A」は、「オリンピックと音楽」というテーマで行われたが、そのテーマ設定に関わる経緯や進め方に関して、例年にはない背景があるため、それについて一言だけ説明を加えておきたい。

2019 年は言うまでもなく、翌年に予定されていたオリンピック開催をにらんで、オリンピックをめぐる文化や歴史を考える展示会、シンポジウムなどの催しものが各地でいろいろ行われた。そのようなもののひとつとして、日本近代音楽館（正式名称は「明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館」）の主催で毎年行われているレクチャーコンサートシリーズでも、この「オリンピックと音楽」というテーマを取り上げることになり、本共同研究の参加メンバーのひとりでもあった渡辺が、そのレクチャーの担当を依頼された。

やや私事にわたる話になってしまうが、渡辺はたまたま 2019 年度より本学のスタッフとなり、はじめて音楽大学に勤務する機会をもった。渡辺の専門は音楽文化に関わる歴史的・理論的な研究であり、これまでもつばら総合大学の文学部に勤務していたから、演奏の専門家が身近にいるような環境に身を置いたことはなかった。たまたまこのような話が舞い込んできたのを機縁に、実技を専門とするメンバーとも協力してレクチャーコンサート全体を作り上げてゆく試みを行ってみようと思い立ち、メンバーの方々にその旨の提案したところ、快く同意してもらえたことで本年の「共同研究 A」はスタートしたのである。そのため、最後の成果発表会に向けて各自がこのテーマに沿った研究を行うという通常の「共同研究」のルーティンワークに加えて、レクチャーコンサートの企画・実現に向けた取り組みを並行して進めてゆくという、例年にはない課題がメンバーには与えられることになった。

本年の「博士共同研究 A」の履修学生は、クラリネット 1 名（竹内彬）、ピアノ 1 名（安並貴史）、それに音楽教育 3 名（野曾原紗綾、増田久未、佐藤由佳子）という構成であった。もとより、ひとつのレクチャーコンサートを実現するのに十分な布陣というわけにはいかず、隣の「共同研究 B」のメンバーやその他の先輩、後輩学生などにも助っ人としてはいつてもらう形となったが、限られた資源をうまく生かしつつひとつのレクチャーコンサートに結実させてゆくことは、それ自体としても楽しい課題であった。ともあれ、2019 年 12 月 12 日（木）に学内で行われた研究成果発表会には約 15 名、同月 14 日（土）に明治学院大学白金キャンパスアートホールにおいて行われたレクチャーコンサートには約 60 名の参加者を得て、成功裡に終了することができた。この論集には、レクチャーコンサートにおける

私自身の講演原稿を、当日、時間の関係で割愛した部分も復元した「完全版」の形で掲載するとともに、学生の皆さんが授業内や研究成果発表会で披露してくれた研究成果を可能な限り寄せてもらい、一同に集めることができた。当日の演奏自体は残念ながら収録することが叶わなかったが、それに向けて制作されたフライヤーとプログラム冊子をご覧いただければ、それらも含めて今回の共同研究の成果を形作っていることが実感されるであろう。

ただその一方で、今回の共同研究が、日本近代音楽館のレクチャーコンサートの企画と連動する形で展開されたことが、共同研究全体の方向性にとって一定の制約となった面があることも否定できない。本論集の目次をみて、「オリンピックと音楽」というテーマから想像されるものとはだいぶ違っているという印象をいただいた方も多いのではないだろうか。「オリンピック」というテーマは文化や芸術を考える上でかなり多彩な切り口を提供してくれる大変魅力的なテーマである。それに比して、本論集に収録されている論考は、狭い範囲に偏っており、オリンピックと直接関係のないものもだいぶ含まれているように、あるいは感じられるかもしれない。

周知の通り、日本近代音楽館は、近・現代の日本の作曲家の活動に関して日本有数のアーカイヴを構築している専門資料館である。今回のレクチャーコンサートも、日本近代音楽館の企画・主催になるものであるという限りで、近・現代の日本の作曲家の活動に焦点を定め、これらの人々がオリンピックという行事にどのような形で関わったかという観点からオリンピックという行事について、また日本の近・現代の音楽シーンにおける音楽家たちのあり方に考察を加えるということに関心が向かいがちになったのは、ある種自然なことであつたとも言えるだろう。もちろん、共同研究のテーマとしての「オリンピックと音楽」というテーマ自体にそのような制約を加えるつもりは私自身には全くなかったのだが、結果的には共同研究全体の方向性が、かなりそういう方向に引っ張られる形になった面があることは否定できない。

しかし考えてみると、「オリンピックと音楽」というテーマが潜在的に相当に多彩な方向性を孕んでいることを考えれば、これだけの人数、これだけの期間でそれらを網羅した形で論集にまとめることなどできるわけもない。むしろ日本の近・現代の作曲家を中心的な論点に据える形で土俵を定めることで、それなりにまとまった論集としての体裁を整えることができたという面もあるのではないかと思っている。そのあたりのことについては読者の方々の忌憚のない評価を待つほかないのだが、冒頭に掲載されている私の講演原稿と関連させてお読みいただければ、それぞれの学生の皆さんが、私の趣旨をよく理解し、それを補う形で共同研究を盛り立ててくださった様子を窺い知ることができるのではないだろうか。

最後に一点、お詫びを申し述べておきたい。この論集は本来言うまでもなく、共同研究の行われた 2019 年度のうちに刊行されるべきものであつたのだが、私のスケジュール管理の甘さゆえに年度内の刊行に間に合わなくなってしまった。加えて、態勢を立て直そうとした矢先にコロナ禍に巻き込まれ、慣れないオンライン授業への対応などに追われているうちに、刊行がすっかり後回しになってしまった。次の年度のものとほとんど区別のつかないような時期になってしまい、はやくから原稿を揃えて待っていてくれた学生の皆さんに、いまさら言い訳などしてもしかたのないことだが、ご寛恕いただければ幸いである。